り遠過ぎ、又首卷の餘り堅きために適當に見やうと云ふ時に自由に動かず、餘り眠をこすつたとか、或は烟草を餘計に吸んでそれが爲めに惡くなる事、其他神經系統の病氣の爲めに眼の惡くなると云ふ事が不完全な所から屢々眼の働きに缺損を起す事がある。外國の例を取れば外國には塗板も白い板が宜いか、黑い板が宜いか、石盤の如きも白石盤が宜いか、黑石盤が宜いかと云ふ問題になつて居る。現在は黑い「チョーク」は手の汚れる事もあり。此方は排斥せられて黑板が用ひられて居る。石盤も黑い石盤が勢力を有つて居る。

又地圖も種々の色で彩りてある、種々の線もあつて眼を勞らすものと見て居る。故に地圖を採用するにも注意をして採用し、地圖を見せる時間の長さも注意せねばならぬやうになつて來る。又近年段々研究されまして喧しく唱へられて居るは習字の文字の書き方であつて、外國では斜めに書く書き方と、眞直に書く書き方とあつて今では眞直に書く方を廣く用ひて居る。斜めに書くはいかぬと云ふ事になつて居る。

低く出て人に親しや夏の月

史傳

野村望東尼（つゞき）

下村三四吉

余は、前回に於いて、望東尼の京都行きまでの事

を叙べき。望東尼が京都に赴れしは、文久元年の末なりしが、それより、柳櫻こきまぜて錦なせる都の春を過ごし、新樹翠滴る頃に及びぬ、唐代の詩人杜甫はいへり、「時に感じて花にも涙を濺ぐ」と。望東尼が當時の感懷は、實にかくの如きものありしならん。五月雨暗くして、杜鵑のしきりに血に叫ぶをきゝつゝ、彼れは、再び行裝を理めて、鄕里に歸りき。

望東尼は、少きより一わたりの書史にも通じて、尊王の大義をわきまへ、前にもいへるごとく、己れが名をさへ望東とつけて、その意を寓しけり。この人にして、半歲の日子を京都に費したれば、感奮せるところ、思ふに少なからざりしなるべし。京都は、政治の中心たらざること、久しきに亘れりしといへども、さすがに至尊の在ますところにして、九重の奥ゆかしく山や水や、すべて歷史の色を帶びつゝ、一種の感想をひき起すの材料ならぬはなし。さして、當時、幕府はその失政のために、天下の非難を彼ふり、勢力次第に衰運に傾き、尊攘の志士は京都に集まりて、國事に奔走し、活氣甚だ盛んなりき。もとより尊王の摯情に富める望東尼は、此等の人士に接し實況を目擊せるより、その性行にやうやく義俠勇烈の風を加へ來れり。

時勢の變遷は、しばらくもその歩をとどめず。和宮の關東に降嫁あらせられしより、公武の合體は、形式にこそ表はれたれ、その實は全く擧らざりき。かしこくも、主上は「うたでやむ時ならなくに、唐衣いつまでわだに日を過すらん」と憤らせたまひしかど、幕府はもとよりこれを實行するの力なし。望東尼が福岡に歸りける年、即ち文久

二年十月、將軍家茂に詔して、宜しく叡旨にしたがひ、速に攘夷の策を決すべきことを命じたまひぬ。

時に、薩長土の三藩主は、闕下鎮撫の命を受け、その威望天下に重かりしが、中にも、長藩は尊攘黨の主盟たるが如きさまにて、京都に於ける論議は、多くその左右するところなりき。かくて、三年の春に及び、將軍家茂は朝命によりて上洛せり。天皇これを機とし、四月十一日男山に幸し將に八幡の祠前にて攘夷の節刀を家茂に賜はんとしけるに、家茂疾と稱して出でざりき、浪士等これを憤慨して、遂に天皇の親征を請ふに至りぬ。家茂已むを得ずして、勅を奉じ五月十日を以て攘夷の期となし、偏く諸侯に告げぬ、長藩の如きは、この命を奉じて、外艦を下ノ關に砲擊し、朝廷の優賞を被ふれるほどなりき。

かくて、攘夷説の潮勢は、將さに天下に漲らんとせしが、八月に及び、薩摩、會津二藩の連合策のために、朝議急に變じ、長藩士は、禁門の警衛を解きて京都を逐はれ、尊攘説を主張せる三條實美以下の七卿を奉じて本國に走りぬ。七卿の官爵は削られ、つぎて長人の入京は禁ぜられぬ。これより攘夷の事やゝ緩みき。

明くれば元治元年の七月、長藩の家老福原越後等、陳情のために兵を率ゐて入京し、會薩の守兵と戰ひ、飛丸宮闕に及びぬ。蛤門の變といふものこれなり。長藩はこれがために、朝敵の名を被ふり、幕府は尾張侯を總督として、長藩を討たしむ。

然るに、長藩は、罪を謝して、恭順の意を表し

ければ、戰を変ゆるに及ばずして、總督は征討の師をかへしぬ。但し長藩に奔りし三條公以下の五卿は、幕府の命により、筑前太宰府に移されて、拘禁の身となりき。時に元治二年（卽ち慶應元年）正月なり。

慶應元年には、望東尼は、齡すでに六十に達せり。しかも、勤王の志は老いてますます盛んなり。尊王の事に心力を盡されたる五卿が、福岡よりほども遠からぬ太宰府の地にさすらひたまへるを聞きける彼れは、悲哀の情に堪へず、その二月廿五日太宰府の天神に詣でし次でを以て、密に請うて五卿に見え、起居をうかがひまつりぬ。このをりの有樣は、望東が知友に寄せたる手簡中に詳かなれば、左に引かん。

この二十五日、なうで侍りたれば、ありがたくも御前にめさせられ、いといとねんごろなる御ものがたりをうけたまはり、誠に誠に生けるかひありと、身の幸は此上なく侍るものから、御代のみだれよりかゝる鄙にもうつらせたまへるなど思ひ奉れば、墨染の袖かわく間もなく、御いらへだに聞こえまつりがたかりつれど、心をとりかへ、かしこくも、問はせたまふことども、かれこれきこへ奉りて、なむ御つつしみの折からなればにや、御まゆずみも、御はぐろもせさせたまはで、御衣もただに御袴ばかりまゐりたる御さま、いといとかしこくもあはれにおはしますになむ。五卿の御中にても、ことさら三條の君めでたき。御向ひすぐれさせたまひ、女にしては、紫が書きたりけん源氏物語しのび出でられて、須磨の浦やこゝならんと、あやにたどら

れ侍りてなん。皇國の有志はさらなり、たれ人か、彼の君の御爲に、いのちをすてざらん。誠に誠にかなしきめを見奉るものかなと、その後は、ことさら御歸京とくもならせたまふやうに、神かけて祈りまゐらすばかりになん。都のとのにつれづれと待たせたまふらん女君がたの御心さへ、おしはかり奉り、かなしうも、あぱれにも、忘るゝひまなく思ひ奉るぞかし。……

純潔なる熱誠と、深厚なる同情とは、溢れんばかりにて、これを表出するに精緻流暢なる文藻を以てし、委曲悲惻の趣致を極め、眞に至文といふべし。されば、この一書は、ただに望東が五卿にまみえし當時の情況を知るべきのみならず、これによりて、望東の人物如何を想見するに餘りありとす。

望東尼が忠誠は、十分に五卿たちに認められぬ。その六十の賀をものせしにつき、三條公より「すべ國の、正しき道をふむ人は、ちとせの坂も、やすくこゆらん」との歌をたまはりけるが、望東は「老が世をちとせとおほせし宮人に、あまる齡をささげまつらむ」と答へまつりぬ。前文と相映發して、餘情掬すべし。（つゞく）

あづさ弓ひくかずならぬ身ながらも
なほひいる矢はただに一すぢ
（望東尼）

ローランド夫人傳（つゞく）

鄭越生補譯

議院内の暴擧忽ちにして市中一般に傳播しければ、ジャコビン黨人は勿論、放逸無賴の暴民一時